

鷗外の歴史小説試論

——その転機の一側面——

(一)

木村真佐幸

一

鷗外における歴史小説への転機は「乃木殉死」にあることは、既に先学の説くところである。しかし、その転換はある日突然なされたものではない。そこには鷗外の潜在意識を醸成する精神風土があった。具体的にはこれを「鷗外における嫡男意識と家名尊重」(唐木順三)といってもよい。一方その中にも、人生の真実を志向する文学者鷗外の近代的自我の台頭も見逃すわけにはいかない。この両者の関係を、「鷗外の官僚と文学」といってもよいし、また「中世的なもの」と近代的なものとの両輪(高橋義孝)は、はては鷗外における「昼の思想と夜の思想」(「追儼」明治四十二年五月)ということばを引用することも可能である。

ところが、この両者の均衡を大きく狂わした事件がつづいた。一つは明治四十三年のいわゆる「大逆事件」であり、いま一つは大正元年九月十三日の乃木夫妻の殉死事件にほかならない。特に後者に関して、権威主義的秩序体系の中に位置する鷗外の嗅覚が、世論に対して異状なままと形容するに吝でない鋭敏さをもって反応を示した。一体に鷗外は世論世評に対しては敏感というより、意識し過ぎる傾向がある。私はそこに鷗外なる人間の特異性をみる。したがって乃木殉死はもちろんのこと、さらに乃木殉死の世論に対して反応し、その形象化が歴史小説第一作「興津弥五右衛門の遺書」に外ならない。

それでは、その世論とはどのようなものであったろうか——。明治天皇の御不例、崩御、御大葬、乃木夫妻の殉死等……そしてさらに「興津弥五右衛門の遺書」に対する反響等……一連の世論の動向について知悉すべく、明治末から大正にかけての新聞・雑誌を中心とする関係資料を北大図書館を中心に、本学および道立、市立各図書館、各新聞社、その他関係機関ならびに関係者(乃木静子夫人の関係者)北海道夕張郡栗山町在住)の資料蒐集整理に当たってきたが、未だその途上に過ぎず、加えて限られた紙数の関係もあって、今回はその中間報告にとどまらざるを得ない。なお、いま一つ、鷗外の歴史小説にあらわれた女性像には、夫乃木に殉じた(文字どおり夫の死を見とどけてから自らの生命を絶った)気丈な静子夫人像が投影されているのではなからうかとも考え、これらも問題点の一つに含めて、以後考察をすすめてみたいと思う。

二

「その正月十九日に、母君産気つき給ひ、健かなる男の子を生み給ふ。これぞ我が兄君なる。神棚に燈明か、がやき、祖母君涙さへ落して喜び給ふ。亡き人の旅の日記にも、初孫の顔見ん事を樂しむなど、幾度か記し給ひつれば、これやがて祖父君の生れかはり給へるよなどいひつつ、家の人々やうやく愁の眉すこし開きつ。いかでこのちご、よく生したてとだれもだれも思ふ。母となり給ひても、まだうら若くましますせば、祖母君むねと引受けて育て給ひぬ。男の

子の初児とて、あつかひいとむつかしく、夜啼きなどするを、夜も寝ずといふさまにて心づかいし給ふ。」(小金井喜美子「森鷗外の系族」)

以上の述懐にも示されるように、鷗外は生れながらにして、嫡男として代々の御典医を継承すべく格別の期待の下におかれ、加えて森家の家名を高揚すべき絶対的至上命令というバックボーンに規制されつつ、そのパーソナリティは形成されていった。明治の二大文豪として鷗外と並び称せられる漱石が、例の邪魔物あつかいの結果としての里子、養子、転籍等の幼少期と比較する時、まさに両極の感を免がれ得ないのである。

「父君は日ごとに藩主の御殿に上りて御機嫌を伺ひ、家職の人々の病あるを診察し、また病というほどならずとも、病に野らぬやうだれ彼に注意し、午ごろに帰り来て、家に待つ患者を見給ふが常」の父静男であり、また「殿の外出」に「み伴する日は必ず薬籠を携へるといった気の配りよう——とにかく世は明治維新という一大変革があり、廃藩置県、武家政治は崩壊したこの時点においてなお、静男は御典医としての生活を継続しており、旧藩主への忠勤ぶりは昔と少しも変わるどころがなかったのである。ではこの父に対して鷗外はどのように見ていたのであろうか。明治四十四年二月の「カズイスタカ」によると、「翁は病人を見てゐる間は、全幅の精神を以て病人を見てゐる。そして其病人が軽かろうが重かろうが、鼻風だろが必死の病だろが、同じ態度でこれに対してゐる」ところが花房医学士は、「何かしたい事若くはする筈の事があつて、それをせずに姑く病人を見てゐるといふ心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だと詰まらなく思ふ。Intéressantの病症でなくては厭き足らなく思ひ、かつ「始終何か更にしたいたい事する筈の事があるやうに思つて」満ち足りなさを感じているが、「父の半生を考へて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行く」のに反し

て、「父は詰らない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐるといふことに気が付いた。宿場の医者たるに安んじてゐる父の resignationの態度が、有道者の面目に近いといふことが、臆気ながら見えて来た。そして其時から遽に父を尊敬する念を生じた」と、若い花房医学士を通じて鷗外は、黙々として一途に仕事に打ちこむ父の姿に対して尊敬を念を語っている。この父への尊敬の念は鷗外の精神形成の土壌となつたであろうことは否定できないはずである。唐木順三氏は、「家長への奉仕と服従はやがて藩主への奉仕と服従につながる」ことを指摘している。たしかにこのことばは、「孝は忠へ」発展していくものとして興味ぶかいが、鷗外においては時にそれが異状に近いまで強力に体现されることがある。わたくしは、やはりそこに鷗外の「官僚と文学」という「二つの顔」を見ずにはいられない。因みに明治四十二年一月一日の鷗外の日記をみると、「御所に拝賀にまゐり、それより右の順序に年礼に往く、寺内大臣、桂大臣、小松原大臣、谷本次官、閑院宮、青山御所と廻り、明舟町にて午餐し、それより平田大臣、石黒男、山県公、小池男、岡田次官、亀井伯と廻る。寺内、山県、亀井の三家にては祝酒を饗せらる」(傍線引用者)とあり在京の折の元旦は必ず旧藩主(森家の)の亀井伯に礼を尽くしていること、さらに回礼の結びがきまつて亀井伯であること——加えて「祝酒を」とあるところから、年頭のあいさつのみにとどまらず、亀井伯に対して親昵の情の特別さを物語っていると考えられる。さらに翌明治四十三年の元旦は、「大阪より宮嶋にゆく夜汽車の中で新年を迎ふ」とあるため、この年の亀井伯への年賀は不可能であったが、それでも鷗外は九州熊本等の連隊をまわつて一月十六日新橋着、帰京翌々日の十八日、「西紳六郎と亀井伯常洋行の事商議す」とあるように「亀井伯」のために何かと奔走し、次いで二月二十六日「夜亀井伯常乃福羽子逸人を富士見軒に餞」し、二十三日「亀井伯常留別の宴を第宅に設けらる」。

予も与る」三月五日「亀井伯爵效常、福羽子爵逸人の洋行を送りに横濱にゆく……」等々、鷗外の記事の各所に「亀井」なることばは実に多く散見される。したがって、亀井伯の長男の出生祝（明治四十三年六月二十二日）はもちろんのこと、はては、「亀井公效矩に贈位せらるることを宗秩寮に交渉すと云へり。乃ち亀井家に通知す。」という具合に、亀井家の位階榮進にまで運動する忠勤ぶりである。時に鷗外、齢五十近く、既に軍医総監、陸軍省医務局長、医学博士・文学博士等々であったのである。

以上述べてきたように旧藩主（このことば自体不適切なのであるが）に対して陰に陽に忠勤する態度は、やがては天皇への忠誠につながらないとはどうしていえよう。しかし、そうはいうものの片や権威主義的秩序体系の中にある官僚鷗外と、人生の真実を志向する文学者鷗外は、時には内面的に激しい葛藤が行なわれていることを見逃すわけにはいかない。それだけにその両者の均衡が失われた時の凝集反応はやはり注目しなければならぬ。そのような意味からも、明治天皇に対し、終始変わらぬ赤誠を示した乃木の存在を鷗外はどのように受けとめていたのであろうか——。またそれが、鷗外の内面性の耕作にどのような作用したのであろうか——。これは極めて重要な課題といわなければならないはずである。以下、鷗外と乃木との接触ならびに、明治天皇に対する乃木の赤誠とは……どのようなものであったか、ということに焦点をかえてみていきたいと思う。

三

まずはじめに、鷗外と乃木との接触および交友関係について鷗外の記事から拾ってみると、「明治二十年四月十八日、谷口と乃木川上両少将を其客館に訪ふ。乃木は長身巨頭沈黙厳格の人なり。川上は形体枯瘠、能く談ず。余等と語ること二時間余、其深く軍医部の事情に通

ずること尤も驚くべし」と、立場や期間を異にしても共にドイツ留学という旅先での邂逅という要素はあるにせよ、乃木に対する心象は、「沈黙」して「厳格」、それでいて「軍医部の事情に」精通していることから、鷗外にとってはある意味における理想の人物として映ったに相違ない。その後、明治二十年五月三十一日「夜乃木、川上両少将の家へ会す」、同九月四日「谷氏を訪ふ。乃木少将に逢ふ」、同十月六日「乃木少将の『テゲット』客舎に在るを聞く。往いて訪ふ」、同十月二十三日「早川の宴に赴く、両少将（略）……等皆至る——帰途兩将官とシエール骨喜店 Cafe Schiller に至る。」、同十一月三日「井上勝之助天長節の宴を公使館に開く」ここで乃木と同席し歓談、同十二月二十八日「公使宴を張りて同邦人を招く、余も亦与る。乃木少将の祝辞嘯々解す可らず。」と時には言辞に自負する鷗外の批判精神もちらつくが、総じてみると、下級軍医将校の鷗外が、将官の乃木に対してかなりの頻度をもって接しており、しかも時には和かに歓談の花を咲かせていることから、畏敬の念のみならず、かなりの人間的接触があったことも想像に難くない。その後、日露戦争中における鷗外の「うた日記」にも、あの格調の高い「乃木將軍」（明治三十七年十二月）があるが、それらについては紙数の関係から割愛するとしても、この両者の接触は鷗外からの一方通行では決してなかった。明治三十七年一月九日「第一師団軍医部に乃木来訪」（息子勝典の読書相談のため）、日露戦後の明治四十一年五月十二日「乃木大将希典来て斎藤男を学習院に雇ふことを話し給ふ」、明治四十二年一月十一日「乃木大将希典来て村上其一を雇はむと語り給ふ。」と人事などについても乃木は鷗外に相談しているところから、乃木の側にとっても鷗外を信頼に足る人物とみていたことが伺われる。また同年三月十六日「乃木大将希典整骨家某を紹介し給ふ」、同三月二十一日「乃木大将希典の紹介し給へる名古屋武修館長虫明盛光といふもの来ぬ。」等のことからなお

一層の確証が得られると思う。さらに二。三付加すると、明治四十三年三月十日「乃木大将希典箱入娘云云の話をなす。」、同年八月九日「乃木大将希典中年炎になる。往いて訪へば、夫人出でてこれより赤十字社病院に入らんとすといふ。」とあるように乃木のささやかな病氣に対しても何かと気を配っていることは、これは軍医という立場よりも、むしろ人間的な接触到外ならない。明治四十五年四月二十日「乃木大将のために Pata-vieja に贈る序文を草」し、同四月二十四日「上原大臣の晩餐会にゆく。乃木大将希典来て赤十字に関する意見を艸せしを謝し、Carmen Sylva 妃に逢ひしことを語り、自権諸家の言語に注意すべきことを托す。」とあるところから、ここに両者の信頼度は一段と高まったと理解し得よう。かくして大正元年九月十三日の「殉死」を迎えることになるが、このことについては、後でふれることとして、鷗外は乃木の死後においても、当然関係は種々の形において継続されていく。大正二年一月六日「猪谷不美男来て乃木大将希典遺囑譯書の事を語る。」、大正三年一月十五日「福岡哲太郎を猪谷不美男に紹介す。乃木將軍の筆跡の事に関してなり」、大正四年九月十日「高橋静虎がために乃木將軍の歌を訂正す。」、大正六年五月十八日「荒木博臣の墓に詣り、途次西周、乃木希典夫妻の墓をも訪ふ。」とある。紙数の関係で個々の解説批判等を加える余裕がないが、総じて乃木の存在は、外来文化と伝統文化との間におこる歪みにさいなまれる日本近代社会に、一つの倫理の形成樹立を希求していた鷗外にとつては、極めて大きい存在であったことを認めねばならないと思う。そのためには、乃木が明治天皇を絶対的精神の支柱として生きていたいくつかの事例をあげて一層の確証としなければならぬ。そこでいま、明治天皇の御不例、崩御等に対して乃木はどのような態度をとったであろうか——、特に視線をその部分にしぼって当時の新聞からそれらのことについて摘出してみたいと思う。

明治四十五年七月二十七日の東京朝日は、「乃木大将の至誠」と題して、「各元老、大臣、元帥、新任官、同待遇、公爵数百名は、聖上陛下御発病以来日日参内、天機を伺候しつつあるが、其内乃木大将は毎日午前六時、午前十時、午後六時の三回宛参内、岡侍医頭、徳大寺侍従長より御経過を拜聴し、片時も御悩みの御軽減あらせられん事を祈誓し居れり。大将の至誠何時もながら感佩に堪へずと某高官は物語り居たり。」ついで七月二十八日同紙は、「乃木の日参——心痛の余り日々三回までも参内して(略)寝食も廢する迄御心配申上げ、誠忠の一念に(略)途中朝夕両回靖国神社に詣り——降雨の日も一日も欠かさず：」、同七月三十日付「乃木大将談」として、「乃木大将は廿九日午前三時宮中を退出し、一睡の後、午前六時身体を清め、新しき軍服に新しきカラ、カフスをつけ再び参内せんとしつつ、往訪の記者に語りて曰く『昨夜の御容体では皆驚かされた。私は医者の事は解らず(略)今回も尚御持直しになることを信じている』と報じている。そのような乃木大将の赤誠も空しく、明治四十五年七月三十日午前零時四十三分、明治天皇は崩御された。乃木の衝激は想像にあまるものがあつた。大正元年九月十六日の東京朝日に、「殯宮内の乃木將軍」と題する正親町伯爵の回顧談がある。「何人も宮中に来ては皆身を整へ礼を厚くするのは普通である(略)が未だ曾て乃木伯爵の様に一糸乱れずと云ふ調子な人は見た事がありません——崩御後も毎日一回は吃度参内して御靈前に伺候し数時間身動きもせず殆ど木像の如くなつて黙禱され(略)乃木さんだけは別の席を設けた位です(略)崩御以来の乃木さんの顔色憔悴して如何にも深き憂ひに沈めるものであつた事は誰でも気が付いて居た所ですが、殯宮に入った時の悲痛は又格別で長い間唯凝として身動きもしない。又私は先達て二度東車寄せ近くの道路で乃木さんが只一人悄乎しんぼりとして腕車の置いてある方へトボ／＼歩いて行く処を見ましたが俯向き勝ちな大将の顔を覗くと打沈んだ眼元

から熱涙がホロ／＼と零れ落ちてカーキ色の軍服の胸に伝はって居るのを見て私も思はず胸が迫って貰ひ泣きをした」とあり、北海タイムスも大正元年九月十九日の「乃木風聞」の中で、明治天皇の御発病（明治四十五年七月二十日）から御大葬（乃木の殉死まで）までの四十五日間に「参内百七十回」と報じているところから見ても、乃木の明治天皇への至誠はこの一事のみでも充分に肯なずけるものがあると思う。

四

以上のような乃木の明治天皇に対する赤誠ぶりについては、同じ武人としての鷗外は当然畏敬の念を抱かざるを得なかった。それなのに「乃木殉死」に対して「半信半疑」という鷗外は結果として何を招いたであろうか——。乃木殉死後の鷗外の日記について、既に先学が指摘しているので、ふたたび繰返すことに躊躇いを感じるが、視点をかえてみるためあえて引用すると、「大正元年九月十三日（金）晴、轎車に扈随して宮城より青山に至る。午後八時宮城を発し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出て帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す。十四日（土）陰。乃木の邸を訪ふ。石黒忠恵の要求より鶴田禎次郎、徳岡熙を乃木邸に遣る。十五日（日）雨、午前乃木の納棺式に蒞む。妻明舟町に往き夜半に帰る。十六日（月）陰、軍医部長を第一衛戍病院に会して訓示する所あり。C. Carra と称するもの松本楽器店の肩書ある名刺を通じて乃木希典の歌を求む。拒絶す。稲垣長次郎来訪す。十七日（火）陰、矢嶋柳三郎を鶴田禎次郎の許に遣つて相談せしめ、岳父を再び赤十字社病院に入らしむることに決し、橋本監次郎を明舟町に遣る。荒木虎太郎、日野静、虫明盛光来訪す。」そして「十八日（水）半晴、Moneight、三浦守治、綾部勉来訪す。午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を弔して中央公論に寄す。」とある。先に述べたように、十四日の

早朝、乃木の死に対して「半信半疑」、これが十八日、すでに「興津」を草している電撃執筆は一体何を物語るか……。その間の日記をあえて全部引用したように、鷗外は乃木夫妻の自殺によってショックを受けている上に、外形的には一、鷗外は公的には軍医部長会議、二、私的には岳父の再入院の手配、三、数多い来客、鷗外にとっては身心共に多忙すぎた。加えて不機嫌そのものである。私は、もし仮に鷗外の心に余裕があったとしたならば、「興津」はもう少し変わった形のものになったのではあるまいかとさえ思う。既に鷗外と乃木との交友関係について説いてきたように、鷗外にとって乃木は、我ながら深い理解者という自負があったのではなからうか、にもかかわらずその乃木の真意をつかみ得ず「半信半疑」は鷗外にとって思わず本音をはいたことばではなかったか——もしそうだとするならば鷗外は己れ自身に対し、激しい苛立ちと感じたのに相違ない。乃木の歌を求めにきたものに、「拒絶す」とはげしい調子でぶつけている。そしてそれに追いうちをかける世評世論：各国の反響等々……。

諸家は「興津」の成立に対して「乃木殉死」にその端緒を求めている。私ももちろん否定すべきものではない。しかし、前述のような鷗外の精神状況の延長線上に、「乃木殉死」に対しての激しい批判、世論の動向、加えて御大葬のため各国元首の来日中の出来事であり、鷗外にとっては心粹する乃木の死の正当性を、また日本武士道の正しい評価を認識させるべく鷗外の焦躁にも似たものがあつたのではなかったか——。一体に鷗外は感情的になつてゐる時の執筆は早い。「最後の一句」にしても「高瀬舟」、「寒山拾得」にしてもみなそうである。しかも日記などからは執筆のモチーフなどおおよそつかみ得ないところなどは、漱石と全く趣を異にしている。それでは乃木殉死の衝激に、さらに加速的に追いうちをかけた世論とはどのようなものであつたであろうか。明治天皇の御不例から崩御、そして乃木殉死とつな

がる世論の流れの中からその主なものを指摘してみたいと思う。

五

大正元年八月三日、東京朝日は「新時代には新人物」と題する論説を掲げた。一部を引用すると、「明治天皇が在位四十五年間に於ける日本の進歩は、殆ど世界の奇跡として見らるゝ程に盛なる者なりしと雖も、然かも日本の政治上の情態に至りては、未だ頗る幼稚を免れずして、諸種の改むべき者なり。或る論者は日本の文物が欧米先進国に比して少なくも六七十年は遅れたりと称したるが、政治上の事に付ては此批評必ずしも過酷に非ざる覚ゆ。」ついで「山桂両卿」を批判し、「新時代には新人物を必要とす。明治の初年以來常に国政に参画せる天保の山県、松方、井上の諸老が今尚国政に重大なる關係を有するは、千八百八十八九年代に於ける独逸のビスマルクと同じく聊か新陳代謝の理に背けるの感なくんずばならず」と厳しい調子で政治の老朽化を衝き、「吾人は英邁なる新皇帝の勇断を以て新人物の活躍する新時代の一日も速に來らんことを期待して止まざるなり。」と、明治から大正に改元してわずかに数日後、まさに「明治の終焉」を遂げるがごとくはげしい筆致であった。これはいくらジャーナリズムの世界とはいえ、やはりそこには世論の支えがあったことは否定しがたいと思われる。さらに同紙は大正元年八月六日の論説で「先帝の記念事業」と題して、「時としては御手植の松の枯死したるが為めに、之に關係せる物堅き老人申訳なしとて割腹せんとしたる事さへあり」として、「先帝の記念事業を起すべきは、吾人滿腔之望む所なるも、地方人の間或は誤って其の計画の精密ならざる者あらんことを慮かり、茲に一言注意すべき者なり」として、明治大帝の偉業を讃えんがための盲目的行為に警告を発したと思われる。にもかかわらず各地で憂うべき事件が発生した。「神を恨んで自殺——崩御に失望した神官の子」(大正

元年八月六日付)が出たり、その他九州でも自殺未遂が起つたりした。それらの兆しを察知した東京朝日は、ついに大正元年八月十日、「殉死の弊風」と題する論説で総括してこれを警告せざるを得なかつた。つまり、「自分が奉事したる人の死を悲しみて、自ら之に殉ずるは昔時より存する風習なるが、決して奨励すべき事に非ず、其心情に於ては諒すべき所なきに非ずと雖も、要するに不心得の事なり。」からはじまって、「我朝に於ては垂仁天皇の御宇よりして夙に之を禁制せられ、孝徳天皇大化三年の詔にも厳に之を禁ぜられ詔に違ひ禁を犯す者は、其族を罪すと令せられたり。」と「殉死」、「追腹」の弊風を歴史的にとらえ、逆に「殉死」が讚美されている支那、満州朝廷は「亡滅」を招いたとし、「何事ぞ、此極めて愚かなる風習は、二十世紀の今日、世界一等国に列したる大正の新天地に於て、尚其の片影を留めんとは、」と東京、九州の前記事件を指摘し、「先帝陛下の御聖徳を慕ひ奉るの余り、精神に異状を來し、此の如き愚挙に出でたる者あるは、其情多少察すべき者なきに悲ずと雖も、本来此の如く不健全なる臣民を出したるは、寧ろ帝国の恥辱と謂はざる可らず。然るに世は偽忠君愛國の徒ありて、敢て或は此の蠻風を奨励し、満州朝廷の筆法に倣うて往々にして讚美の声を此の不心得なる殉死の上に放たんとす。是れ実に我が帝国二千年來の遺訓に背反し、我が帝国の名譽を毀損せんとする曲事ならざる可かざる。」と論じ、さらに自殺者は「生存競争」の「劣敗者」であり、「若し一の殉死者が他の殉死者を招きて一代の流行を招致するが如き」ことになると、「支那と同じ旧思想の日本たるを自白する事」となり、「世界の嗤笑を招くに至る可し。」と多分に各国の元首が御大葬列席のための来日を意識した鋭い舌鋒であり、最後に、「吾人は乃ち一面に於て当局者に向て此際殉死者の取締に注意せんことを望み、又一般社会に向て苟くも殉死奨励の嫌ひある行動を戒めんことを望む者なり、言ふ迄もなく真に皇室に忠良なる者

は益々勤勉奮闘して、大正の新政を翼賛し奉らざる可からず。今日に於て徒らに自殺する者は、先帝陛下の大御心に副はざる不忠不義の臣民なり。吾人は此の如き不健全なる旧思想を排斥し、六千万同胞をして文明国民の態度を以て、奉公の義を全うせしめんことを望む。今日に於て苟くも殉死奨励の言を発して得々たらんとするが如き者あらば、吾人は彼等を目して其の文化の程度に於て、千九百年前の野見宿弥にも及ばざるの劣等人となさざる可からず。」と激しい語調で「殉死」を批判して、当局への嚴重な取り締りを要望すると共に、まことの「忠」とは何かの本質に迫る論調で結んでいる。同紙はさらに同年九月六日付で、御大葬参拜のために無理算段して上京する地方人を案じて、「世間より忠君愛国家と見られたしとの虚栄心に驅られて」はいけない旨の警告をふたたび掲げた。

ところが、それら度重なる配慮も空しく、大正元年九月十三日夜八時、御大葬の号砲と同時に乃木は割腹自殺、しかも武士の切腹の作法どおり、加えて静子夫人は夫の死を見とどけてから短刀を心臓に、自分の体重を加えて……(石黒談)の悲愴な最後であった。乃木の遺書は死の前夜、つまり九月十二日夜書かれ、「後の諸々の事は静子と相談して……」の意味が認められ、宛名も静子夫人の長兄湯地定基、乃木の弟、大館集作、甥の玉木正之、そして夫人静子あてになっているところから、夫人が死を決したのは少なくとも十二日夜以後であることはまちがいない。乃木は、「此度の所決は西南戦以来の心事」とあるが、夫人にとっては大變な衝激であったことは想像に難くない。それを臆面なく平然と死地に赴いたこの静子夫人をどのように表象するとよいのであろうか——。今、それらの点を詳述する余裕がないが、ともあれ前述のように念には念をいれて警告してきたジャーナリズムの期待はみごと覆えられてしまった。しかも、外ならぬ乃木大将である。朝日新聞が八月十日に論じた「殉死の弊風」は皮肉にも乃木の上に照射

する結果となった。新聞人をはじめ関係者の苦悩困惑が鮮烈に蘇ってくるようである。折も折、御大葬のため世界各国の元首の来日中ともあれば世論は是々非々を以って応えたのは当然の帰結といってよい。ではその世評ならびに世論の動きはどのようなものであったであろうか——。

六

大正元年九月十四日の東京朝日は、「乃木大将の自殺に就いて——日本の風教道德の一案——」と題して「境野黄洋」署名で乃木殉死に對し、いち早く疑問を投げかけた。「乃木大将を武人の典型なりといふは飽くまで単に之を武士道の上より言ふべし大将は一個の武人として大元帥たる先帝の靈に殉じたるものなり其志や壯とすべく其情や感ぜざるを得ず然も之を今日の思想より批評するを許さば大将の行動は唯自己夫妻の情を満足するといふに止まりて尚國家に尽すべき自己あるを忘れたるの憾みなしといふべからざる云々(以下略)」と批判、ともあれ巷間は当然のことながら、「乃木大将の話で持ち切る汽車電車」(同紙九月十五日)であり、また各紙とも世界各国の反響を大々的にとりあげ、中でも、「將軍の死と外人——とりどりなる噂」(同紙九月十五日付)が流れ、はては「十四日の午後彼のプリンクルー氏の令嬢が外出した何処かで、一米国人が『乃木は発狂したのだろう』と言ったのを聞いたとか、『馬鹿な事を為たものだ』と言っていた」(一記者)という記事さえ見える。一方、同日の記事に「志賀重昂氏談」、「三宅雪嶺博士談」、「井上哲次郎」、「理学博士菊地大麓」、「理学博士某教育家談」、「半井桃水」等のやや同情的な比較的隠微な言もないわけではない。また、「三皇子の御驚き——何故の切腹?——」という具合に皇室の方々にも乃木の真意を解しかねる記事、さらに「石黒総監語らず——乃木將軍の心事を察す」ただし、「発表の時到来るまで語

らず」と、軍閥係当局もきわめて歯切れ悪く旗幟不鮮明、同紙の六面には「噫、乃木大将」の見出しで、さらに▽大将の家系と感化▽叔父も弟も又死す▽今回の事偶然に非ず……として明治九年の「萩の乱」の事にまで溯及し、ひとり乃木のみならずその係累にまで及ぶような穿ち方などもみられ、また別項に「世上の一問題」と題し、「情は憐む可し行ひは賞すべからず」と断じたところもある。大隅伯爵は、「酔乎として酔▽一夜を寝ねずして▽將軍の死因を考えた」として、「一は言ふ迄もなく己れの配下より空前の死傷を出せるに對する内心の痛苦である。二には世態の現状に對し事々に不満を感じ來つた結果である。三には兒子を喪い老來聊か内心の寂寥と感じた所（以下略）」とその原因を列挙しているが、おそらく鷗外にとってはどれ一つとり上げて満足するものであつたとは考えられない。また乃木夫人の殉死について三女流教育家——矢島女子学習院長、三輪田女学校長、嘉悦孝子女史等の談話があるが、何れも皮相な常識的見解にすぎない。さらに姉崎文学博士は、「第一に時に於て甚だ悪し御大葬の当日に當りて自殺するが如き何か芝居気染みたり（略）」、法学博士高田早苗は「人心を真面目ならしめる効果は確にある。只此の適用を誤つて殉死を奨励する様なことがあつてはならない。殉死の流行は世を文明から野蠻に引き返させるもので決して賞すべきことではない」とむしろ事後の影響関係を案じ、同じく法学博士浮田和民氏も「乃木夫妻の自殺は誰人も感動はするがその行為や形式や方法通りを國民が実行すれば今上陛下には不忠となり國家の損耗となつて國民道徳上模範とするとは出来ない。國民として皇室に忠義を尽さんと欲すれば先帝の御意志と今上陛下の大御心とを能く奉体して國家の發展を期さねばならぬ。（以下略）」として向後を憂える談話である。さらに股野秘書官に至つては「——先帝の爲め一身を捧ぐるも今帝の御爲に死するも、死は一なり將軍は余り狭量にて國家の上より見るも將軍の身より曰ふも

唯不幸と称するなき——略」とその「狭量」さを強調、また、同紙九月十六日の「寄書」には、「白刃に依つて大将の人品を上げた様いふは鼻眞の引き倒しである」（村井元助）、「黄洋先生の文を読んで成る程と點頭きました」（長嘆子）、「——不信の徒に大訓戒を与へられたのにあらざる乎岡侍医頭の如き反省せよ」（小石川生）と担当医批難まで飛び出したり——結局、「寄書」の係りから「——昨夜、乃木將軍殉死の報を伝ふるや読書の感動は余程甚だしかつたと見へ、日暮頃迄に卅余通の寄書が机上に載つた。概ね長篇で且つ過激であつて云々——」とあるところから、前述の著名人の言のみならず、世論もまさに侃侃諤諤、騒然たるものを想像される。

この激しい世論、巷のざわめきに對し、ジャーナリズムも、明治天皇の御大葬のため各國元首ならびに報道陣の來日中という時だけに困惑の翳が紙面ににじみでている。ましてや日露戦後、外形的にはようやく世界の一等国に列したと自負？しているだけに、その評価の低落を憂い、「誤解を避けよ」と題して再度報ぜざるを得なかつた。「——西洋の道徳は絶対に自殺を否認す。特に神の如き乃木大将の今回の最も不可思議なる自殺に對して總ての新聞は自殺の罪惡なる理由以外甚大の同情を大将に表したるべし。然し大将の性格と日本帝國をよく知れる我れ／＼は其何故に自殺したるやの動機に就て社会に誤解さるゝは誠に遺憾とするところなり又世界の人までが將軍の死を誤解するやも知れず此点に於て日本の新聞は崇高なる乃木大将の死に對して世界に向つて明瞭になすの必要あり云々——（以下略）」、これが「大阪電話」とあるところから、京都桃山御陵における御大葬へ集う世界各国元首要人らへの誤解を案じての布石であり、ジャーナリズムの祈請にも似た心象の表明といつても過言ではあるまい。なぜなら、大正元年九月十七日の大阪朝日の「天声人語」から、先に「殉死の弊風」を世上に訴え、数々の布石をもつて世論の正常化を説いてきたにもかかわ

らず、事もあるうに「乃木」の殉死を結果した、その苦悩と、まさしくお手あげの様相を読みとることが出来るからである。「——倫敦の急進主義新聞デーリーニュースが、乃木大将の死は、近代懷疑論者にサムライの信条を復活せしめんとするものであるといったのは、自分の立場を離れて公平に観てゐる。さうかと思ふと外人は晒わらふだらうなど気を揉む日本人もある。世は様々だ。」とせつかくの布石も水泡に帰した失望に加え、新聞界の主張の不統一を「世は様々だ」と嘆かざるを得なかつたところにこの問題の取り扱いの苦悩がよくあらわれていると思われる。

ところで、とにかくこの「乃木殉死」批判の決定打ともいうべきものがあつた。それは大正元年九月十七日、大阪毎日新聞三面に、京大教授文学博士谷木富氏の約三七〇〇字に及ぶ長文の乃木罵倒の言がすなわちそれである。「乃木さんの事かね、乃木さんは自分は一体平生余り虫の好かない人である、露骨に云へば甚だ嫌ひな人である」とまず劈頭から嫌悪を情と示し、ついで乃木には「一種の銜気があつて時として厭な感じを起させる事がある——」、つまり「乃木は此頃何となく老西郷を気取れるものの如く——何となく銜ふ気味があつて到底桂冠の嫌あるを免れず」として数々の例をあげて激しく難し、「苟しくも大将とも云ふべき身分の人のする事ではあるまい」と断定、さらに西南戦争の折の「軍旗喪失事件」から「旅順攻城」において、「数万の生命を犠牲」にした責任を追求、はては人相上、骨相上から、「大将は所謂孤相である。平たくいへば下賤の相に近いもので到底大将といふ如き高職に上るべき富貴も天分もない」とし、「乃木大将は旅順戦後寧ろ仏門に帰依して菩提を弔ひ正覚を修むるを至当とすべきであつた——(以下略)」と徹底した批難攻撃を加えた。

一方、文壇にあつては、「乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時『馬鹿な奴だ』といふ気が、丁度下女かなにかゝ無考へに何

かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた」(大正元年九月十四日、志賀直哉の日記)といふことばで代表されるように、特に白樺派の冷やかな態度等——、さて事ここに至つて鷗外は、もはや黙過することができなかつた。新聞界に見える主張の不統一、さらに世界各国に対して「誤解を避く」べき主張者の出現を暗に促してゐるようにさえ受けとれる。まして「乃木は癡狂した云々」にいたつては何おかいわんやであつたらう。どうしても乃木の正当性を主張し、日本武士道を弁護し、鷗外なりの見解を小説という形を借りて表現せざるを得なかつた。そして、主人公「興津弥五右衛門」を通じて、「乃木」は「乱心」したのではない。真正正銘であり西南戦以来三十五年間考えつづけてきたその結果に他ならないことを強調しなければならなかつた。

「興津」の執筆のモティーフならびにその辺の事情については、先に述べてきたのでここで重複は避けなければならないが、とにかく初稿「興津弥五右衛門の遺書」には、「ナマの鷗外」が表現されたのみ。したがつてこの「興津弥五右衛門の遺書」には、鷗外のやむにやまれぬ心情の結集した筆のほとばしりを感じざるを得ない。

ところで其の後、殉死問題が、意外の方面へと発展していった。「偽乃木の続出——殉死流行の兆？」(東京朝日九月十八日)、「哀悼の自制——」(同紙九月十九日)「今日に於て割腹殉死せざる者は、皇室に不忠なる者」という風潮に対して警告した)、「乃木殉死と米紙」(同紙九月二十日)、「谷本博士不評判——神戸高商生の憤激」(同九月二十三日)、「元老の反省を求む」(東京日日、九月二十一日)、「死と自殺(上下)」(同紙九月二十一日)、「権威ある死——文学博士三宅雄二郎氏談」(同紙九月二十日)、「乃木大将の墓前で割腹せんとす」(同紙九月二十日)、「乃木殉死と世論」(東京日日、九月二十一日、二十二日、二十六日、二十七日、二十八日)、「同じく「自殺の説」(同紙十月五日、

六日、八日、九日、十日)、「乃木夫妻殉死再論」(北海タイムス、九月十八日)、「殉死の乃木將軍」(北海タイムス、九月十六日、十七日、十九日、二十日)、「東西思想の連鎖——將軍殉死と犠牲的精神」(北海タイムス論壇、九月二十六日)等々……事件発生後、比較的近い時点でも夥しいこの種の論説批評があり、殉死直後とはかなり違った趣で展開している。したがってこれらの世評の流れに対して鷗外は、一応冷静さをとり戻した眼をもってみる時、乃木殉死のやや衝動の結果ともいえる初稿「興津」の主観的色彩を除去し、史実の客観化のため再稿の筆をとらざるを得なかった。結局、他の「殉死小説」と共に「意地」に収められた再稿「興津」が結果的に生まれたと考えられる。

予定の紙数は既につきた。「興津」執筆後の世論およびその反響、また使用し得なかった他の資料、ならびに、鷗外における「歴史小説」の女性像に投影された乃木夫人」等については、いずれ稿を改めてその責を果たしたいと思う。

(一九七一、二、一三)

注1 乃木夫人の検死書末に、「午後九時四十分頃湯地定彦氏来リテ」とある。

定彦氏は静子夫人の長兄定基氏の長男であり、北大農学部を卒業後、勸銀に二十年ほど勤め昭和十六年六月二十一日に死亡——定彦氏の長女従子^{より}さんは永池暁三氏に嫁し、現在夕張郡栗山町朝日三丁目で湯地農場を経営しており、湯地姓は従子さんの長男定暁氏が継いでいる。なお、定彦氏の夫人孝子氏は長女従子さんの許で、昭和四十五年十一月十五日午後三時三十分、八十八歳をもって天寿を全うした。孝子氏は夫定彦氏と共に殉死当夜、いち早くかけつけた方であり、その後乃木会(毎年一月十四日乃木神社)凱旋記念日)にも列席しておられたので、鷗外に関する資料を得ようと再三訪ねたが、御病気のため伺うことができなかった。しかし、今後も御遺族のご好意に甘え何かと資料を得たいと思っている。なお定基氏は、薩摩藩士、定之氏の長男で明治の初め、米國に留学、マサチューセッツ農大で札幌農学校の連

中より、一足早くクラーク博士の教えを受け、帰国後、先輩の黒田清隆に招かれ北海道開拓使に入り、明治十五年二月八日北海道三県分割の折、初代の根室県令になり、後に元老院議員、貴族院議員を経て昭和三年二月十日死亡、なお現在の湯池農場は明治二十五年、当時の道庁から貸付を受けたもの。——北海道史にある定基氏の死亡月日は誤りとのこと(永池従子氏から伺う)。

2 文久元年、つまり鷗外の生まれる前年に近江土山で客死した森玄仙(白仙)をいう。

3 大正四年九月十六日(木)の鷗外の記事に「婦女通信子が引退の報を伝ふ。東京の新聞記者悉く来訪」とあり、記者が引退を確認すると、「寝耳に水だ」と憮然としていたという。そしてその翌日「十七日(金)、最後の一句を草し華る」とあり、「二十日(月)、最後の一句を滝田哲太郎にわたす」とある。

4 漱石の「断片」に、「始めて男と寝た女曰く」始めて女と寝た男曰く「乃木大将の事、同夫人の事」すしの食ひ方、真剣勝負の時の心得」とある。

5 大正元年九月十六日の「小樽新報」に「初め単身切腹せんとせしものなりしが十三日朝に至り夫婦が殊に気嫌よかり」とある。一方、大阪朝日の「高島將軍談」にある「十三日の朝まで夫人に打明けなかつたと見える」とあるのは疑問がある。

6 慶応三年(昭和二十一年)、幼くして神童の生まれ高く、十五歳で医学全科を卒業、中村敬宇の門下生、さらに東大哲学選科生、後教育学科特待生、ヘルバルトの教育学を研究、その後山口高等学校、東京高師の高師、明治三十三年五月ヨーロッパ留学、同三十六年一月帰国、京都文科大学講師、同三十八年文学博士、翌三十九年教授、明治四十四年一月再度欧米に留学。

7 大正二年四月六日の鷗外の記事に「阿部一族等殉死小説を整理す」とある。